

箕口 雅博 教授
退職記念エッセイ

東京駅の思いで

済生会 横浜市東部病院 相川 祐里 (2003年度修了生)

「楽しく子育てしていますか」と気軽に聞いた私に、「子育ては、出口の見えない暗いトンネルの中にいる気分です」と答えたお母さんがいました。妊娠、出産は喜ばしいこと、子育ては楽しいことだと単純に考えていた私は、その言葉を聞いて何も言うことができず途方に暮れたことを今でも思い出します。

筆者は看護系大学を卒業し、看護師・助産師として勤務していました。病院で働き出してすぐの頃には聞こえなかったお母さん達の声が聞こえだした時、学校では教わらなかったけれど確かに大変な心理状態にいる方が、実はとても多いことにも気が付き始めました。そして戸惑うご両親に、どういう声かけをしたらいいのか分からない。せめて相手を傷つけない声かけぐらいはできるようにしたいという思いから心理学を学ぶことを思い立ち、立教大学で心理学修士課程を履修する機会を得、箕口雅博先生にお会いすることとなりました。

立教大学での院生生活は、医療系大学の経験しかなかった私にとっては様々なことがとても新鮮でした。看護ケアでも傾聴や共感とは基本的な技術として習得することを目指し、自分でもそれなりに出来ていると思っていましたが、それをもう一度違う領域から学ぶことで新たな発見や楽しさがありました。また心理学の基本から学ばなければならなかった私は、時に思い込みが強過ぎたり、疑問や課題の検討が不十分になることがありました。それでも箕口先生は学生の思いつきを出来るだけ肯定し、アイデアを実現する方法を示唆しつつ伴走して下さいました。その具体的なエピソードとして私がいつも思い出すのは、東京駅でのことです。私は修士論文の研究で、エジンバラ産後うつ質問票 (EPDS) を使用しました。その日本語版を導入された三重大大学の岡野禎治先生に連絡したところ、海外からの帰国途中で東京駅に行くから、そこまで来てもらえれば相

談に乗りましょうという返事をいただきました。その旨箕口先生にご報告したところ、箕口先生も一緒に東京駅まで来て下さることとなり、東京駅の喫茶店で岡野先生と箕口先生の両先生を前に、私のつたない研究計画書を発表したのでした。

このような先生方のサポートもありなんとか修士論文を提出できた私は、立教大学大学院を卒業し、その後は九州大学医学部附属病院精神科の研究生となり、現在はまた関東へ戻り臨床心理士として働いています。勤務する恩賜財団済生会横浜市東部病院は、24時間365日対応の救命救急センターをもつ地域中核病院です。その中で私は主に周産期領域での心理臨床活動を担い、児童虐待予防対策のひとつとして妊娠中から子育てまでを病院と地域が連携してささえる「ペアレンティング・サポートシステム」を構築・運営しています。出産や育児に不安や戸惑いの大きい家族が、できるだけスムーズに新しく誕生する子どもを受け入れられるよう、妊娠期から共に産後の生活をイメージし養育環境の整備などをサポートすること。そして最終的には、子どもへの虐待を発生前から予防することを目的としています。日本の医療機関では、保険点数が伴う医療行為にしか経済的な価値が発生しないため、利益を生まない予防的システムに理解を得ることは困難を伴います。活動している自分自身でも時に、結局余計なおせっかいをしているだけなのだろうかと不安になることもあります。そのような時にも、自分のアイデアを熱心に聞いてくださった箕口先生を思い出し、また先生から教わったコミュニティ心理学でも示される、問題を個人個人のものだけにせず、個人を取り巻く社会に働きかけ、予防を重視し、心理教育や問題の発生しにくい社会づくりを目指すという考え方から勇気づけられ、毎日の臨床に臨んでいます。

箕口先生のご退官によせて

医療法人鉄蕉会 亀田総合病院 上田 将史 (2003年度修了生)

この度はつつがなくご退官を迎えられたことを心よりお慶び申し上げます。

箕口先生には学部時代から、医療機関、母子生活支援施設、精神障害者の社会復帰施設、留学生会館など、様々なフィールドをご紹介いただきました。臨床や研究活動に触れながら座学に臨むことで、自己の将来像をイメージしつつ、学ぶことができました。また、現場で作ったネットワークが様々な広がりを持ち、現在の私の活動を支えて下さっているという恩恵も感じております。箕口先生の講義で度々耳にした、“軽快なフットワーク、綿密なネットワーク、そして少々のヘッドワーク”は、私の現場での活動の基本姿勢になっています。

箕口先生からは本当に様々なことをご教示いただきましたが、特にコミュニティ心理学とアドラー心理学を臨床のベースにできたことは、臨床活動を行う上で、大きな財産となっています。これまで医療機関で働く傍ら、保健所、福祉施設、EAPの事業所、教育機関など、様々なフィールドに携わってきましたが、比較的大きなギャップを感じずに業務に専念できたのは、両アプローチが確固たる理念を持ちつつも、実際の運用にあたっては柔軟性を重んじている点も大きいのではないかと考えております。

現在のメインの臨床現場は、最先端医療を掲げ、常に状況が目まぐるしく変わっていく急性期の病院なので、おそらく従来の面接室中心の心理臨床家像のみで業務に臨むことは困難ではないかと考えています。自己を含めて環境を俯瞰しながら、必要な資源と上手くつながっていくスキルが重要です。また、支援の対象となる方は幅広く、年齢層は小児から高齢者まで、疾患は精神科も含めた全科対応で、

がんの終末期から精神科の急性期まで対応しなければなりません。さらに患者さん本人以外にも、家族や医療スタッフ、時には地域資源のサポートを行うこともあります。したがって、特定の心理療法のみで問題を解決しようとすることは現実的ではないと思います。少ないマンパワーを有効に活用するためにも、ネットワーク構築を行いながら、病院全体のメンタルヘルスの向上へ働きかけることも大切な役割になります。

一方で複雑性の心的外傷や強い希死念慮等、深い問題を抱えている方へ支援を行う場合などは、専門的な心理技法が必要となる場合もあります。しかし、このような介入を行う場合もその効果が単に症状の軽減や回復に留まらず、他の資源のサポートとの相乗効果に繋がるような工夫や調整をしていくことで、より意義のある介入にすることが可能です。その際にはアドラー心理学やコミュニティ心理学的な発想や介入が役に立ちます。近年様々な学派が介入技法の有用性を高めるために、改良を試みているようですが、“柔軟性”“環境”“資源”など、両アプローチと親和性の高い点が多く取り入れられているように思います。そういった現状を見るにつけて、時代の変化に耐え得る介入方法をご指導下さった箕口先生への感謝の念を抱いております。

末筆になりましたが、箕口先生のより一層のご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げます。長い間本当にお疲れ様でした。私も徐々に中堅というポジションになってきているように感じております。先生から学んだことを後進に伝えていけるよう、日々精進していく所存です。今後とも、ご指導のほど、よろしく願いいたします。

コミュニティ心理学の教えとコミュニティに生きる臨床態度

とちぎ若者サポートステーション 川上内科クリニック 佐藤 良香 (2003年度修了生)

「心理 コミュニティ」というキーワード。これが箕口先生との初めての接点でした。社会人として働く傍らボランティア活動をしていた当時、自分が臨床心理士になるとは考えていませんでした。しかし、ボランティア活動をとおして、「悩みや苦難を持つ人は、地域生活のなかで、人と人との関わりをとおしてこそ変わって行ける」という感覚があり、社会に働きかけられる方法がないかと、模索していました。そこで上記2単語を検索した結果、再上位にヒットしたのが箕口先生のお名前と「コミュニティ心理学」だったのです。そして、さっそく単位履修生としてコミュニティ福祉学部の授業とゼミに参加させていただくことになったのが、私がコミュニティ心理学を学ぶようになったきっかけです。

心理学を体系的に学んでいない門外漢の私を、先生は快くゼミに迎え入れてくださり、私に関心をもってボランティア活動者の心理的变化についての研究を、コミュニティ心理学の枠組みのなかで進めていくことを、励ましてくださいました。先生の講義をとおして初めて知った「コミュニティ感覚」「社会的文脈のなかで人を見る」「非専門家との協働」「予防とケアの重視」「コンピテンスの重視」「黒子性」という、コミュニティ心理学の諸理念にわくわくしました。また、アドレリアンとしての面ももつ先生の、他者を勇気づける姿勢、そしてどんな時も相手の主体性を尊重する態度を身近に学び、コミュニティ活動家のイメージが固まりました。現在の私の臨床活動のポリシーは、「臨床態度はアドラー心理学的に。行動原理はコミュニティ心理学的に」というものです。

修士課程終了後、心療内科クリニック、次いで若者自立支援機関で臨床心理士として働くようになり11年経ちました。臨床心理士として働くようになった当時は非常に未熟で、アドラー心理学的とも

コミュニティ心理学的ともいえない臨床でしたが、先生が「臨床のコツ」として頻繁に口にされていた、「クライアントには何かおみやげを」ということだけは実践しようと意識してきました。クライアントとの出会いが1回限りでその後が継続するかどうかはわからない状況でも、その面接がクライアントにとって何か役に立つものであるように努力をする、という教えでした。心療内科臨床ではリラクゼーショントレーニングなどを通して、1回の面接のなかでクライアントに少しでも楽になって面接室を後にしていただけるようにスキルを身に付け、若者自立支援では若者が社会に参加していくための勇気をもてるような関わりを意識していき、今に至ります。

しかし、なかには困難なケースもあり、そういう時にいつも、先生の「コミュニティ活動で重要なのは、綿密なネットワークと軽快なフットワークそして少々のヘッドワーク」という言葉が頭をよぎりました。自分の臨床が行き詰まっているときは、これらのどれか（あるいは全て）が不足しているからだと反省し、これら3つのワークに改めて取り組もうと心新たにしました。

現在私が働く若者自立支援の現場では、さまざまな立場（支援者、家族、専門家等）の人々がネットワークを組み、協力をしあっています。そのネットワークの中で私自身も助けられることが多々ありました。臨床心理士として専門性を発揮すると同時に、いちコミュニティメンバーとしてコミュニティで支えられる—そうした相互性のなかで生き、コミュニティの問題にコミットしていくことは、私の生涯のミッションであると感じています。その世界への窓口となってくださった箕口先生には、感謝の言葉以上に、自分がミッションを果たすことで感謝を示していきたいと思っています。

未来へ伝えること

浦和大学こども学部 専任講師 柴田 崇浩 (2003年度修了生)

箕口雅博先生におかれましては、ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

さて、このたび無事定年を迎えられ、退職されますとの由、誠におめでとうございます。

箕口先生にご教授いただき、早10年以上の月日が流れました。時間の流れは本当に早いものです。大学院前期課程修了後は主に学生相談で勤務しておりましたが、その後、縁があって現職に至っております。嬉しくも箕口先生と同様に大学生に向けて教鞭をとっておりますが、大学院でご教授いただいた基本的な臨床家としての態度や基本的発想に始まり、地域臨床の基本から応用までの実践は、現在の臨床や教育に少なからず影響していることをしみじみと実感いたします。

多くのことをお教えいただきましたが、特に印象に残っていることは、コミュニティ心理学の地域臨床活動を支える3つのワークでしょう。「軽快なフットワーク、綿密なネットワーク、少々のヘッドワーク」と、トレードマークの満面の笑みを浮かべながら重みのある優しい声で箕口先生が語り始めると、「またか」「出た!」と、そのフレーズを期待した学生の反応がみられ、クラスが一体になるような感覚で、みな嬉しそうに聴いていた様子が今でも思い出されます。

3つのワークについては、当時は単に知識として印象深く覚えていた程度だったと記憶していますが、臨床経験を積み重ねる毎に、その概念の実践的な側面は深まって内在化されてきたと感じます。

この10数年は主に大学生を中心に臨床活動をしてきましたが、社会参加への過渡期にある大学生は、様々な葛藤を抱えて思い悩み、自己肯定感の低下から行動できなくなることが少なくありません。大人の許可が必要な管理社会の中で幼児期から育っていることが現代の大学生の特徴といえます。管理

主義のしつけや教育では、与えられた課題の成否が問われますが、完璧な人などいませんので、失敗や挫折を多く経験することになります。そのため、大学生には幼少期からの慢性的な不全感が募っていて、思い悩んで自信を失うことが多く、行動ができなくなっていることが多々みられます。行動ができなくなると、時間の経過と相まって社会的非難を受け、焦燥感に苛まれて後悔したり、自責感を抱いたりすることになります。自責感自己肯定感をさらに低下して不全感を増加させるというように、半永久的なネガティブスパイラルに陥るのです。学生にはこのスパイラルからの脱却は困難と感じられているものですが、3つのワークが活路をしめしてくれます。

学生への個別面接や講義において、3つのワークの考え方を伝えることがあります。そうすると、大学生活の人間関係や卒業のための単位取得、将来に向けた就職活動など、身動きできなくなった学生が自発的に自らの行動を選択し、行動を始めるきっかけになっていきます。そればかりではなく、活動し始めた後の円滑な問題解決スキルの獲得を促進して、成功体験を得ていく機会になり、学生がエンパワーされていくのです。

3つのワークの概念は青年期の課題の社会的自立に対して、自分自身で課題解決していく指針を与えてくれることから、自立を促進し健全な発達をもたらす成長可能性を保障する発想として重要なことを実感しています。これからも大学の講義や演習において、3つのワークを伝えて、箕口先生のように大学生と共に歩んでいきたいと思っております。

在職中はたいへんお世話になりました。箕口先生のご指導のもと、次世代も育てていることと存じます。今後もご指導いただきたく、ますますのご活躍を願っております。

魔法の言葉

埼玉県／栃木県 SC 中村 香奈子 (2005 年度修了生)

箕口先生に初めてお会いしたのは大学に入学してすぐ、新入生オリエンテーションだった。私の基礎演習の担当教員が箕口先生だった。気が付けば先生と出会ってもう 15 年になる。この間に先生から与えてもらったものは計り知れない。私が立教大学に入学して幸運だったことは先生に出会いある言葉を与えてもらったことだ。

「綿密なネットワーク、軽快なフットワークそして、少々のヘッドワーク」これはコミュニティ心理学のキャッチフレーズであり、私が臨床活動をするうえで最も大切にしていることだ。自分が活動をするうえで迷うときや心が折れそうになったときなど、いつでも私を助けてくれる魔法の言葉である。

私は現在教育機関で臨床活動を行っている。肩書はいろいろだが、メインはスクールカウンセラー (以下、SC) だ。SC は公立学校の場合、一人職場である。また、1 年契約のため同じ学校に複数年いられる可能性は低い。そんな環境で SC という仕事をしていくためには、専門知識はもちろん、他職種と協働できる柔軟性や組織の中で働くための社会性などが必要になってくる。私はこれまで比較的管理職に恵まれて、生意気な意見を聞いてもらいながら社会人として必要なことも教えてもらってきたと思う。でも、当然心が折れそうになることもあった。前任 SC から引き継いで間もない頃「SC なんて頼りにならない」と、私が聞こえるところで言われたこともあった。何もさせてもらえないうちから“いらぬ”と言われていた気がした。学校での SC に対する理不尽な扱いはこの世界では割と多いことだと後に知った。

私はその度にあの言葉を思い出すようにした。心で唱えて、自分ができることは何かよく考えた。不思議とやるべきことが見えてきた。フットワーク軽く方々とかかわりながら少しずつ実績を積むことで

信頼できるネットワークを築いていった。専門知識を多用せず、相手の言葉を使いながらコンサルテーションを行った。任期が終わるころには「もうすっかり馴染んでいたのに、寂しいな」と言われた。“馴染んでいる”と思われていたことが嬉しかった。

コミュニティに“馴染む”ように動くことを「必要な手順のひとつ」として取り組めたのはネットワークを大切にするコミュニティ心理学を学んでいたおかげだと思う。入学して箕口先生に出会っていなかったら、今の私はなかったと本当に感謝している。箕口先生の言葉はいつも力を与えてくれた。いや、きっと箕口先生の存在そのものがいつも私を見守ってくれるような、大きな温かい力があつたのだと思う。

先生がご退官の年になって、「私はこれまで恩返しをしたのだろうか」と不安になった。実務経験 10 年目の今年、私は出産のため一旦現場を離れることになる。「何が恩返しになるのか」とぐるぐる考えては答えが出ない自分がかかりすることもあった。そんな時、先生から大きな課題が渡された。自分が今まで何をしてきたのか、今後どんな活動をしていきたいのかなどじっくり考えるいい機会となった。まだまだ未熟な臨床家だけれど、次世代 SC の育成に携われたらと考えるようになった。現在行われている研修内容の見直しだけでなく、学校という組織で働くために必要な知識や姿勢を伝えられたらと思った。その前にやることは山ほどあるので心がまた折れかけられるかもしれない。その時はまた魔法の言葉を唱えていこうと思う。

「綿密なネットワーク、軽快なフットワーク、少々のヘッドワーク」

でも今度は心の中だけではなく、声に出して多くの人に伝えていきたいと思う。この言葉をこれからの世代に伝えていくことが今私にできる恩返しではないかと考えている。

箕口先生から学んだこと

心理臨床ネットワーク アモルフ 宇田 亮一（2009年度修了生）

◇箕口先生との出会い

2008年春、わたしは30数年の会社生活にピリオドを打ち、臨床心理士の資格取得を目指して立教大学大学院に入学しました。その受験の際、箕口先生とお会いすることになりました。箕口先生が面接官で、わたしが受験生という関係です。わたしは家内から「受験に失敗したら、その時はあっさり諦めて、またサラリーマンにもどって働いてね。浪人というのは、たのむからやめてね」と言われていましたので、この面接はわたしにとっては、かなりプレッシャーのかかる場面でした。さすがに〈浪人はできないな〉と思っていましたので、ある種の緊張感がありました。その緊張感のせい、今、面接場面を思い出そうとしても、箕口先生との具体的な言葉のやり取りは、何一つ思い出すことができません。ただ、先生がわたしを緊張させまいと、柔らかな微笑み、優しいまなざし、温かな心遣いを投げかけ続けてくださったことは、今もありありと心の中によみがえってきます。

私は会社生活で人事畑が長かったせい、採用面接で応募者の方をリラックスさせることの大切さはわかっているつもりです。ただ、箕口先生の面接官としての態度・姿勢は、そういう言葉で片づけられない何かがありました。それを言葉ではうまく表現できないのですが、あえて言えば、わたしの対応は人事担当者のスキルであり、箕口先生の対応は、一人の人間の存在のありようのような気がします。この印象は今もまったく変わりません。箕口先生と出会ってから8年ほどの時間が流れましたが、先生の立ち振る舞いは、単に面接官としての所作ではなく、常日頃の身体化された所作であることを実感しています。

◇箕口先生からの学び

先生から学んだことは大きく分けるとふたつあ

ります。ひとつはアドラー心理学であり、もうひとつはコミュニティ心理学です。このふたつの学問の共通点を、わたしなりにいえば、〈人間を“個体”というよりも、“関係”の中でとらえる〉ということになります。この〈人間を“関係”の中でとらえる〉という着想は今も、わたしの臨床の基本を構成していますが、ここではそのことについては触れません。今、ここで触れたいのは、箕口先生が〈これらの学問を現実の中でどのように実践されていたか〉です。これもまた、言葉にするのが難しいのですが、あえていえば、“献身”“他者愛”“謙虚”“地道”“継続”“まごころ”“誠心誠意”といった言葉が浮かんできます。臨床家にとって〈カウンセラーとクライアントの関係は“横の関係”である〉ことは基本中の基本だと思いますが、先生は、この枠組みをすぎまじいほど徹底して実践されていました。その徹底ぶりは、ある種の宗教性があるといってもよいほどなのですが、先生は、決して道徳、倫理、規範、規律といったたぐいのものを振り回しませんでした。ですから、先生の立ち振る舞いは、とても自然です。ここが先生のすごいところだと思います。“面接官—受験生”関係だけでなく、“教授—学生”関係、“研究会主催者—受講者”関係においても、先生はその姿勢をずっと貫かれていました。もちろん、私だけでなく、すべての人に（たとえ、相手がどんなに若い人であっても）貫いておられたのです。ですから、先生の〈研究室〉は、まるで〈家庭の居間〉のような雰囲気がありました。居心地がよかったのです。いつも、大勢の学生がたむろしていました。そういう意味で、わたしが先生から学んだことは、ふたつの学問というよりも、“先生の生きる姿”だったということに、この文章を書きながら、あらためて気づいた次第です。箕口先生、本当にありがとうございました。

CBT, IPT 実践に生きる箕口教授の教え

メンタルクリニック エルデ 小山 拓哉 (2011 年度修了生)

私は3年次編入学で立教大学へ入った。箕口教授の研究室に所属したいと希望していた私は、編入試験で箕口教授が面接試験官として目の前にいらっしゃることにとても緊張していたのを覚えている。一方で教授の包み込むようなやさしい雰囲気に箕口教授の研究室に所属したいとさらに強く思ったのもよく覚えている。学部の2年間、院の2年間、“箕口研”に所属出来たのはとても幸せであった。

その4年間、および現在進行形で学ばせて頂いていることを、私は臨床実践に活かそうと日々奮闘している。そのすべてを記載するには紙数があまりにも少ない。主だったものを僭越ながら記していきたい。

私は普段、メンタルクリニックとカウンセリಂಗグループで対面型の個人面接を主な活動としている。箕口教授からは特にアドラー心理学とコミュニティ心理学、TATを学んだ。前者二つはともに「個人と環境との相互作用」を指向する理論であり、TATは投影法検査である。私は基本的に面接室ではクライアント（CI）個人としかお会いしない。TATも実施したことはない。しかし、私のような臨床家にも箕口教授に教えていただいたことは大いに役立っている。

臨床で私が依拠している実践スタイルは主に認知行動療法（CBT）と対人関係療法（IPT）である。ともにアドラー心理学やコミュニティ心理学、TATとは理論的に無関係な療法である。CBTとIPT自体も共通点はあるものの無関係なものである。しかし、箕口教授に教えていただいたことを踏まえるとこれらが有機的に重なりを持ち、よい相乗効果が発揮されると考えている。

まず、活かされるのがTATを実施する検査者の態度である。箕口教授からは「重ね焼き」というTAT解釈法を学んだ。この解釈法は被検者が各図版について語るストーリーを個々ばらばらなものとし

てではなく、そこに共通するパターンを読み取るものとするものである。しかもその中から被検者の物事に対する対処法、つまりストレングスを読み取るものとするものである。この「ストレングス」という考えは箕口教授の教えの中に一貫して流れていると思う。この態度を学んだおかげでCBTではCIの認知パターン、IPTでは対人コミュニケーションパターンを読みとるのが楽になったし、CIのパターンを「修正すべきもの」ではなく、「そのパターンはどのような強さ、機能を持っているのか」という観点から見ることができる。特にCBTではアドラー心理学の「認知論」との共通点が多く、認知パターンや機能の読み取りの際に大変重宝する。

「どのような強さ、機能を持っているのか」という観点はアドラー心理学の「目的論」とも矛盾なく両立する。さらにアドラー心理学には「対人関係論」も主要理論としてあるが、この二つを持ってCIをアセスメントすると、「重要な他者との交流でCIが目的としている意図がうまく伝わりきっていない。では、どんな工夫をすればその目的が達成しやすいか」というようなことが考えられ、IPTがやりやすくなる。たいていの場合、アドラー心理学という「課題の分離」を意識するとその目的の達成が容易になるという印象を持っている。IPTでは焦点となっている重要な他者とも会って、私がCIの代弁者としてその目的を伝えることもあるが、これはコミュニティ心理学の「コンサルテーション」とほぼ共通する。このように、CBTもIPTも個人面接でありながら、「個人と環境との相互作用」を考えていかなければ上手くいかないものなのである。

以上のように、箕口教授から教えていただいたことは非常に多く、私の臨床実践には必要不可欠なものになっている。箕口教授、お疲れさまでした。そして、これからもよろしくお願い致します。

コミュニティを実感する大切さ

流通経済大学学生相談室 小林 美寿々 (2012年度修了生)

先生のもとで学んだ期間は、大学3年生のゼミから大学院修士課程の2年間、そして心理職として働き始めてからの研究会等を含めると、約7年にわたりお世話になっています。今回このような機会をいただき、あらためて箕口先生から学んできたことを振り返るとともに、先生のもとで過ごした日々は貴重な経験であったことをより深く感じました。

先生のゼミや授業等の講義では、ケースの見方やコミュニティ心理学を中心とした心理職としての動き方などを学ぶことができました。そしてそれ以上に、先生が学生をはじめ様々な人と関わる場所を実際に見ていて、コミュニティ心理学で大切な、人と環境がつながっていくことを日常で自然に学べたように思います。例えば、ゼミでの皆の気張らない雰囲気、そして常に電気が点いていて先生と誰かがいる研究室は、よりそのことが表れていたように感じます。

先生のゼミでは、始まると同時に恒例の近況報告がありました。大学3年の参加当初は、恒例ということもあってか、先週と今週で新しい事はあるかしらと考えるぐらいでした。しかし回を重ねるごとに、一人ずつ近況報告の時間があるのは、ゼミ生一人ひとりが箕口ゼミをつくっていること、お互いの存在をしっかりと認識できる時間という意味があるのだと思うようになりました。この時間に、ゼミ生それぞれの近況とその気分を察していく時間があることで、ゼミの期間が長くなるにつれ報告の仕方にその人らしさが自然と現れてきたように感じます。近況報告に限らずとも、学生の力を第一にしてくれる先生のゼミは、ゼミを通して皆と関われば関わるほどその人の新しい一面や意外な一面がよりあらわになってきたことから、個性豊かな人が多かった

ことを思い出します。それは同時に、きっといろいろな個性をだしても大丈夫という先生の大きな包容力をはじめ、応じてゼミ生の雰囲気も出来上がってきたことから、自然と個性が表れてきたのかもしれない。何より、上記の事を言葉ではなく、空気のように感じられるところが箕口ゼミにはありました。

そして、先生の研究室は、学年問わずゼミ生や先生にコンタクトを取りたい学生等いろんな人が出入りをしていましたが、振り返ればそこにはゼミと同じように必ずと言っていいほど挨拶と交流がありました。誰かが来室すれば先生が挨拶から談話の自然なつながりを創られ、研究室を出る頃には新しい知り合いが増えていました。それもあってか、先生の研究室には、たくさんの資料や本、そしてゼミ生からの贈り物や写真、誰が置いていったのか分からないものもたくさんあります。それは自然にコミュニティが生まれ、また更新されていく、常に動的なコミュニティがあったことを表しているように思います。

先生のご専門のコミュニティ心理学は、体得していくことで活きる面があり、私にとっては理論や概念を頭で理解した気でも実践することの難しさを感じる時があります。しかし、ふとゼミや研究室での先生と人との関わりを振り返ると、理論が現実と繋がるたくさんのヒントを先生は伝えてくださっていたのだと感じます。コミュニティの大切さ、それは私自身、先生をはじめゼミの皆や研究室で交流してきた方々との関わりから実感します。先生から学んだこと、そして重要性を感じ取っていてもまだ言葉にうまく表せないことも、これから大事にしていきたいと思っています。

箕口先生のご退職に寄せて

立教大学大学院現代心理学研究科 宮田 瑠子

私が箕口先生のもとで学ばせていただいたことの1つに、「軽快なフットワークと綿密なネットワーク、そして少々のヘッドワーク」というコミュニティへ関わる際の姿勢を表した言葉があります。私はこの言葉が大好きで、大学院生活でも何度も背中を押されました。私がこの姿勢の大切さを知ったのは、修士論文の面接協力者を探していた時でした。私は修士論文で、東日本大震災の被災地である東北の障害者施設職員の方にお話を聞き研究を行いたいと考えていたのですが、そのようなコミュニティと繋がりがなく、どのように協力者の方と繋がっていけばいいのだろうか悩んでいました。そのような時、箕口先生から、「この方を訪ねてみるとういのですよ」と協力者につながる教授をご紹介いただきました。ご紹介いただいた教授のもとを訪ね、箕口先生からご紹介いただいたこと、研究の概要についてお伝えすると、「箕口先生のご紹介なら」と快く引き受けてくださり、研究に協力してくれそうな施設をご紹介していただくことができました。今思えば、私が全く繋がりのなかった東北の障害者施設の方と交流を持つことができるようになったのは、箕口先生が日頃からもっていた綿密なネットワークのおかげであり、またそこに思い切って飛び込むことができたからだと感じます。この時に私は、「軽快なフットワークと綿密なネットワーク、そして少々のヘッドワーク」という姿勢で、自ら積極的に物事に取り組むことや、そこで出会った人とのネットワークを大切にすることが、コミュニティに関わる上で大切だということを学びました。

また私が、軽快なフットワークで新しい場に飛び込むことができたのはなぜだろうかと振り返ってみると、箕口先生が日頃から肯定的なメッセージで「勇気づけ」てくれていたからだと感じます。先生

がその時々にあった言葉で「勇気づけ」てくださったおかげで、私は大学院生活や修士論文に積極的に取り組むことができました。この「勇気づけ」も私が箕口先生から学んだこと1つで、私自身が先生に背中を押されただけでなく、私の行なっているRA業務の際にも大切さを感じるがありました。私は、立教大学の東日本大震災復興支援推進室において、復興支援活動や、学生の復興支援活動をサポートするRA業務をさせていただいているのですが、仕事を始めたばかりの頃は、どのように学生をサポートしていけばいいのだろうか日々悩んでいました。そのような時、箕口先生の「勇気づけ」で、私自身自信をもって物事に取り組めた経験を思い出し、私も学生が自信を持って活動に取り組めるよう「勇気づけ」てみよう、努力するようにしました。すると学生は、自ら積極的に活動に取り組んでくれ、より良い復興支援活動を行えるようになりました。この時私は、自信を持ち安心して仕事に取り組めれば、人はたくさんの力を発揮できるということに気がつき、「勇気づけ」の大切さを知りました。

「軽快なフットワークと綿密なネットワーク、そして少々のヘッドワーク」や「勇気づけ」などのように、箕口先生のもとでは、人やコミュニティとどのように関わっていけばいいかという、臨床家として土台となる大切なことをたくさん学ばせていただいたと感じています。私が先生のもとで学ばせていただいたのは大学院に進学後であり日は浅いのですが、たくさんのことを学ばせていただけたこと、またこのような記念誌に先生のもとで学んだことを書かせていただけたことを心から感謝しております。大学院生活では、たくさんのご指導いただき誠にありがとうございました。ご退職後も、先生のご多幸を心よりお祈り申し上げます。